梅風全集

第二十一卷

荷風全集

第二十一卷

岩波書店

昭和三十八年十月八日　印刷
昭和三十八年十月十二日　發行

荷風全集第二十一卷
定價六百圓

著者　永井壯吉
發行者　岩波雄二郎
發行所　東京都千代田區神田一ツ橋二丁目三番地
株式會社　岩波書店

落丁本・亂丁本はお取替いたします

© 第十一回配本　精興社印刷　牧製本

目　次

斷腸亭日記卷十五（昭和六年）……三
斷腸亭日記卷十六（昭和七年）……六五
斷腸亭日記卷十六續（昭和七年續）……一五一
斷腸亭日記卷十七（昭和八年）……一九九
斷腸亭日記卷十七續（昭和八年續）……二四一
斷腸亭日記卷十八（昭和九年）……二九七
斷腸亭日記卷十八續（昭和九年續）……三三三
斷腸亭日記卷十八續（昭和九年續〻）……三九九
斷腸亭日記卷十九（昭和十年）……四一九
斷腸亭日記卷第十九續（昭和十年續）……四八五
後　記……五三一

斷腸亭日乘　三

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo

斷腸亭日記卷十五

昭和六年歳次辛未荷風年五十有三

正月元日（舊曆十一月十三日）朝來同雲黯澹たり、鷲津郁太郎年賀に來る、午後より雪降る、夜小星を訪ひ屠蘇一盞を飲み十一時頃自働車にて歸る、雪歇まず、

正月二日、雪歇みしが空晴れず、終日執筆、夜銀座に往き龜屋にて食料品を購ひ、藻波にて夕餉を食す、歸宅の後執筆深更に至る、空晴れ寒月殘雪を照す、

正月三日、晴れて暖なり、終日机に凭る、夜番街に往く、

〔原本朱點、以下同じ〕

・正月四日、晴れて暖なり、午後神樂阪の鶴福に往き園香を招ぎ夕餉を食して歸る、燈下新年の賀狀を閲す、文士画工の年賀を機會となし自家の抱負をれいれいしく廣告するもの尠からず、實に厭ふべきものなり、醫者辯護士等の廣告がはりに年賀狀を出すは職業柄さして厭ふべきことにもあらず、藝術家の自家吹聽に至りては倨傲らしくも見え、またさほどまでにして名を賣らずともと淺間しくも見ゆるなり、滑稽なるは病中妻に代筆させましたと書き、或は自家の肖像を印刷せしものなり、されどこれ等のことも今は一般の習慣となりたればこれを笑ふ吾身こそ却て人より笑はるゝ事なるべけれ、茲に自家吹聽の年賀狀の中最甚しきものを擧ぐれば、京都小山下總町南江二郎の葉書

は雑誌人形芝居の廣告にして自家の研究をいかにもれい〳〵しく勿體をつけたるものなり、画家津田青楓の端書には七年ぶりで東京に舞戻ってまゐりました、私は矢張動いてゐる東京が性に合ひます（昇）來るべき時代に役立つべき青年の指導と私自身の洋畫研究とを專念する考です、過去は過去として茲に新しい第一歩を踏み出さうと考へます云々とあり、俗氣芬々人をして嘔吐を催さしむ、江南文三なるものは自家の寫眞を印刷し、あまりて（ママ）も憤ろしき世のさまはこれなるつらを見ぐるしくしつ、一九三一年元旦前後と書きたる印刷葉書を送り來れり、元旦前後とは何の意なるや、元旦前は舊臘ならずや、くだらぬ事をわけあり氣に仔細らしく理窟ツぽく言ふは今の人の口癖なり、自家吹聽もよし、廣告もよし、大風呂敷をひろげるもよし、今少しく垢抜けて茶氣を帶び諧謔の妙味を感ぜしむれば、見るもの其文才に敬服して亦他を思ふの遑なかるべし、詩人詩佛枕山等の新年口號の如き、蜀山人が年々元旦の狂歌の如き、毫も人をして不快の思をなさしめず、文辭は洗練が第一なり、形式の字句にあらず感情思想の洗練なり、是多年切磋琢磨の餘自ら得來るものなり、

正月五日、快晴、暴暖四月の如し、庭上の殘雪消えて痕なし、夜番街に往く、小星この日七庚申に當りしとて柴又帝釋天に參詣せし由、十七夜の月皎々たり、

正月六日、雨、

正月七日、陰、晡下笄阜子來り訪はる、夜、雨、

・正月八日、雪紛々たり、午下神樂阪の鶴福に飲む、園香來る、雪深更にいたるも歇まず、

正月九日、寒雨霏々たり、

正月十日、晴れて風寒し、終日机に凭る、夜虎の門金毘羅の縁日を看る、

正月十一日、寒氣甚しく室内の水道夕方より凍る、夜番街を訪ふ、歸宅の後小說執筆深更に至る、

・正月十二日、晴れて寒し、午後園香に逢ふ、夜番街を訪ふ、

正月十三日、晴、午後稻叟園香等と新宿追分の鳥料理かもめに飲む、女中の美なること藝者の如く酒肴亦場末に似ず味ふに足る、新宿邊の繁華實に驚くべし、園香余を送りて家に來り少憩して歸る、

正月十四日、晴、終日執筆、

正月十五日、晴、短篇小說紫陽花の稿を脫す、夜番街に飲す、

・正月十六日、晴、浦下園香を訪ひ鶴福に飲む、

正月十七日、晴、

正月十八日、日曜日、晴、夜番街に往く、

正月十九日、晴、浦下牛込の中河に飲す、

・正月二十日、快晴、浦下園香を伴ひ神樂阪鶴福に飲む、紫陽花の草藁を中央公論社に送る、夜風吹出でゝ寒し、

正月二十一日、晴、書簡を理す、枕上淸三家絕句を讀む、

正月二十二日、晴、終日執筆、夜理髪の歸途番街を過訪す、

正月二十三日、晴、終日執筆、

・正月二十四日、晴れて風あり、一昨日笄阜子より書肆春陽堂破産の風説を聞きたれば、余が全集紙型版處分に關して問合せをなす、午後園香を訪ひ、番街に立寄りて歸る、

正月二十五日、曇りて風なし、午後揮毫數箋、夜番街を訪ふ、

正月二十六日、曇りて暖なり、明後二十八日駿河臺例會の由、

正月二十七日、晴れて北風烈し、

・正月二十八日、晴れて暖なり、午後園香を訪ひ中河に飲む、夜杏花子招飲の約に赴く、岡、池田、川尻の三子來る、杏花子二月帝國劇場にてロスタン原作シラノ、ド、ベルジュラクを演ずる由、喜多武清の粉本數卷を借りて歸る、

正月二十九日、快晴、和暖、午前稻叟を訪ふ、午後揮毫二三葉、夜三番町の小星を訪ふ、

・正月三十日、晴れて暖なり、午後三菱銀行に往く、歸途園香を訪ひ夕餉を食して歸る、

正月三十一日、晴れて暖なり、午後小田内生來訪、數日前南米より歸朝せし由、ブラヂル國リオ市正金銀行支店副長榎本榮二氏は、余が二十餘年前紐育市同行支店に勤務中相識りし人、この度小田内生に托しアマゾン河に生ずる藥草より製造せし不老不死の奇藥を贈らる、色は栗のごとく形は大なる墨の如し、小刀にて削り湯に投じて服するなり、小田内氏は上等の珈琲一罐を贈らる、夜市

ケ谷に稻叟を訪ひ、番街に小星を訪うて歸る、月に笠あり、

二月初一、舊十二月十四日　終日風雨、夜空晴れて月出づ、銀座にて買物をなし、ゴンドラ酒亭に一酌して歸る、

・二月初二、暴暖暮春の如し、午下中洲病院に往く、診察を乞ふにまたもや脚氣の症ありとて注射をなす、待合室に柳橋の妓二三人在り、名妓小豐腹膜炎にて命危しと云ふ、哺下神樂阪田原屋に至り妓園香の來るを待つ、晩餐の後園香の知れる女銀座獅子閣の女給になれるを訪はむとて俱に銀座に往き、初更再び神樂阪に立戻り、中河亭に一酌して歸る、

二月初三、暖氣昨日のごとし、夜番街に往く、

二月初四、微雨、午後笄阜子來る、葵山子また來り訪はる、夜銀座食堂に飮す、偶然街上にて伊東氏に逢ひ獅子閣に登り款語夜分に至る、雨霏々たり、

二月初五、立春、終日雨霏々たり、夜番街に往く、

・二月六日、朝來雪紛々たり、脚氣注射のため中洲病院に往く、冬牆國手曰く籾山梓月子再び入院中なりと、病院を出るに雪は小降りになりて空あかるし、日本橋榛原紙舖にて買物をなし神樂阪田原屋にて晝餉を食す、鶴福にて園香に逢ふ、歸途月明なり、

二月七日、風吹きて寒し、堀口大學譯著パリユード美裝本を寄贈せらる、午後揮毫數箋、次の如し、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo

蛸入道の画に

老の身や世にいとはるゝ蛸頭巾

春雨飛燕の圖に

門の灯や晝もそのまゝ糸柳

雪中山水の圖に

讀みかきも馴れて火燵を机哉

・二月八日、快晴、寒氣甚し、正午笄阜子來訪、夜望嶽街の桔梗屋に夕餉をなす、

二月九日、曇りて日の光燭影の如し、午下中洲に往く、脚氣注射三度目なり、歸途鍛治橋〔ママ〕外秘密探偵岩井三郎事務所を訪ひ、園香の客なる伊藤某といふ者の住所職業探索の事を依頼す、伊藤某は大木戸待合七福の女房と關係ある者の由、去年來妓園香を予に奪はれたりと思ひ過り、之を意恨に思ひ窃に余が身邊に危害を與へんと企てゐる由、注意するものありし故、萬一の事を慮り其身分職業をたしかめ置かむと欲するなり、岩井事務所探偵料參拾圓なり、銀座食堂にて夕餉をなし市ケ谷の陋巷に稻叟を訪ふ、病中にて其子二人來りて看護せり、番街の小星を訪ひ夜半家に歸る、雪もよひの空墨の如し、

二月十日、朝來雪紛々、夜に入るも歇まず、終日家に在り、書架用箪笥を整理す、

二月十一日、雪後風又寒し、終日執筆、晡下小星來る、相携へて銀座食堂に往きて飲す、胡瓜も

み味佳なり、酒館太訝に憩ふ、女給以前は三四十名なりしに去年秋の頃より次第に増員し目下百名に至るといふ、歸宅後また執筆五更に至る、

・二月十二日、晴、風稍暖なり、一昨年春頃執筆せし榎物語を訂正淨書す、午後三菱銀行に赴き、神樂阪中河亭に飲む、園香大木戸より來る、されど歡情既に當初相見し時の如くならず、悲しむべきなり、園香初め牛門若宮小路に在り山子といひしなり、去年正月二十四日中洲病院の歸途尾澤藥舗裏の待合新春日といふ家にて始めて相知りしなり、余此の妓のためには散財も尠らざる次第なれど、久しく廢絶せし創作の感興再び起來りて、此頃偶然惡夢紫陽花など題せし短篇小説をものし得たるはこの妓に逢ひしが爲めなり、一得あれば一失あるは人生の常なれば致方もなし、

二月十三日、曇りて午後より雪俄に來る、晡時中洲に往き脚氣注射をなす、尿毒激増すといふ、銀座太訝に憩ひ夕餉をなす、先年新橋の妓峰龍といふものゝ家にゐたりしお艶といふ少女、去年より女給になりゐたり、三番町に立寄り夜十時頃家に歸らむとするに風雪甚しく電車運轉せず、辻自働車も路傍に立往生をなせり、過分の祝儀を遣はし漸くにして歸宅することを得たり、

二月十四日、雪歇みしが空猶晴れず寒氣甚し、終日困臥、夜執筆、

・二月十五日、晴又陰、夜牛門の中河亭に飲む、園香來る、

二月十六日、曇りて風寒し、正午裱匠千鶴堂來る、尙左堂俊滿筆隅田川の圖蜀山人贊の一幅を修裝せしむ、晡下中洲に往き銀座太訝に一茶し番街に赴きて飲す、雨霏々たり、中島健藏といふ未見

の人骨董商林忠正に宛たるゴンクウルの書簡を編輯せし小册子を郵寄せらる、ゴンクウルの書牘は駒込邊の古書肆に在りしを中島氏偶然之を獲たりしなりと云ふ、中島氏は佛蘭西文を善くする青年なるが如し、

二月十七日、舊曆正月元日なり、曇りて寒氣忍難し、終日家に在り、書を杏花子に寄す、

二月十八日、同雲黯澹、寒氣甚し、午後雪須臾にして歇む、小說執筆、夜番街を訪ふ、

・二月十九日、くもりて寒氣稍ゆるやかなり、薄暮園香を訪ふ、家に在らず、牛門の田原屋に往きて飲す、主人と牛門の妓家二十年前の舊事を語る、中河亭に一酌して歸る、

二月二十日、晴れて暖なり、晡時中洲に往き歸途稻叟を訪ふ、番街に飲して歸る、

二月廿一日、曇りて寒し、正午霰降る、數年前筆寫せし紀定丸狂歌集柳北の日誌十餘册を綴ち表帋をつけて保存に便ならしむ、久しく斷ち物庖刀を研がず、臺處の流しにて庖刀小刀鋏を研ぐ、老腕つかるゝこと甚し、晡下笄阜子來る、昏黑園香を訪ひ夕餉を食して歸る、情愛逢ふごとに益冷なり、

二月廿二日、日曜日、午後より雪降り出して歇まず、番街に往きて飲す、

・二月廿三日　曇りて寒氣甚し、午下中洲に往く、尿毒更に減ぜずと云ふ、憂ふべきなり、四谷の妓小豐の家を訪ひ昏黑番街に至りて飲す、園香松戸の家に歸りし由、

二月廿四日、北風吹きすさみて寒し、午後小星來る、夜に入り風休む、園香を訪ふ、

・二月廿五日、晴れて暖なり、草稾（已巳春執筆）を中央公論に寄す、午後笄阜子來訪、夜園香夢路の二妓と牛籠の田原屋に飲す、

二月廿六日、晴、午後執筆、夜番街を訪ふ、歸途月あり、風寒し、

二月廿七日、晴、風やゝ暖なり、午下執筆、晡時中洲に往く、脚氣注射例の如し、歸途永代橋に出で欄に倚りて船の往復するを看る、銀座太訝に憩ふ、偶然もと新橋の妓峯龍に逢ふ、一醉漢あり脅迫して錢を請ばむとす、銀座食堂に飲して家に歸る、

二月廿八日、晴又陰、午後執筆、晡下園香を訪ふ、事情頗厭ふべきものあり、去つて番街に往き夕餉を食して歸る、

・三月初一（陰曆正月十三日）晴れて北風寒し、午後色紙揮毫、晡下望嶽街を過ぎて牛門に飲して歸る、笄阜子書あり、

三月初二晴、風猶寒し、晡時中洲病院に往く、脚氣注射の後梓月子をその病室に問ふ、令息令弟在り、冬牆國手に誘はれ籾山氏令弟令息等と神田學士會食堂に至り晩餐をなす、國手の談に支那の賣藥六神丸は滿洲產の蝦蟇より製したるものにて心臟を强健にするに効ありと、又日本のおとぎり草も効能ある藥草なる由、食後市ケ谷に稻叟を訪ひしが不在なり、番街に立寄りて歸る、

三月三日、晴、風寒からず、始て春らしき日なり、午後笄阜子來訪、島中氏書を寄す、初更稻叟を訪ひしが在らず、番街に少憩して歸る、

・三月四日、春雨霏々、午後牛門の遲々亭に飲む、園香夢路來る、夜雨歇み月あきらかなり、

三月五日、半陰半晴、東鄰の白梅西鄰の紅梅俱に花開く、報知新聞社長野間清治なる者活版摺の手紙を寄せ文章を請ふ、手紙の中に玉稾の取捨と多少の伸縮とは新聞製作の技術上之を社に一任せられたき由をしるす、是人の文を把りて濫に添削改竄する事を公言するものならずや、無禮これより甚しきはなし、頃日朝日新聞社も屢記者を派遣して面談を求む、余笄阜君に依頼して窃に事情を問はしめたるに、隨筆の寄稾を望むとの事なり、朝日新聞は余が曾て銀座のカツフェーに出入する事につき屢中傷の記事を掲げたり、然るに今日俄に寄稿を請ふ、何の故たるを知らず、夜園香の事につき内談をなさむと市ヶ谷の稻叟を訪ひしが不在なり、三番町に少憩して歸る、春月朦朧たり、

三月六日、晴れて暖なり、午前執筆、午後中洲に往く、銀座太訝に一茶し、銀座食堂に飲す、街上にて偶然葵山子に逢ひ再び太訝に飲む、電話にて小星を招ぐ、杵屋宇太郎同孝藏に逢ふ、一同黑猫亭に赴き女給小夜子なるものを見る、廣津和郎作小說女給の主人公なる由にて目下銀座邊にて專噂高きものゝ由、黑猫店口に當店に女給小夜子在りとかきたる看板を出し、樂隊にて囃し立てるさま、宛然緣日の見世物小屋なり、當世人の惡趣味實に窮極する所を知らず、

・三月七日、晴れて暖なり、午後執筆、夜中河亭に飲す、北風吹出でゝ寒くなりぬ、

三月八日、晴、風漸く暖なり、南窗肱を枕にして眠ること半日、黃昏執筆、食後番街を訪ふ、歸途半月の升るを見る、

三月九日、春風日に〳〵暖なり、晏起執筆、日は忽にして午なり、晡時中洲に往く、尿毒稍減少すと云ふ、病室に梓月子を訪ふ、款語薄暮に至る、銀座太訝樓に夕餉を食して歸る、

三月十日、晴、午後執筆、夜番街を訪ふ、歸途大木戸に立寄りて歸る、就寢後俄に發熱苦悶甚し、夜の明るを待ち下女を中洲病院に遣し藥を求む、

三月十一日、黎明大石國手來診、注射治療をなす、惡熱少しく退く、小星來つて病を看護す、夜大石君雨を冒して再來診、また注射をなす、

三月十二日、午後大石君來診、

三月十三日、午後大石君來診、病勢頓に衰ふ、

三月十四日、午後笄阜子來り小說海の草稿を示し校閲を請ふ、此日體溫既に平生に復す、夜摩中に笄阜子の草稿をよむ、

三月十五日、午後稻叟來談、夜眠ること能はず、摩中小說執筆、五更に至る、

三月十六日、黎明、惡寒再發、体溫再四十度に昇る、笄阜子來り注射をなす、子は曾て慶應義塾醫學部に在り醫事に通ずるを以てなり、小星終日病を看る、

三月十七日、發汗衣を霑す、惡寒去りて体溫平生に復す、夜風雨甚し、

三月十八日、晴、西北の風烈し、深夜小說執筆、五更就眠、

三月十九日、微雨、梅花滿開なり、午後笄阜子病を問はる、摩中小說執筆、四更眠に入る、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo